

令和4年度 体育部会研究計画（案）

1 研究主題

豊かな学びが 子供の未来をつくる 体育学習

— 「おもしろいコト」の共有を図り、自ら学び続ける授業づくり —

2 主題設定の理由

(1) 主題設定の理由

① 学習指導要領と子供の実態

子供が生きる未来の社会は、Society5.0の実現に向けて急激に変化の様相を帯び、複雑で予測困難な時代が訪れつつある。これを受けて、学習指導要領（H29 告示）の前文には「これからの学校には、教育の目的及び目標の達成を目指しつつ、一人一人の児童が、自分のよさや可能性を認識するとともに、あらゆる他者を価値ある存在として尊重し、多様な人々と協働しながら様々な社会的変化を乗り越え、豊かな人生を切り拓き、持続可能な社会の創り手となることができるようにすることが求められる。」と示されている。

また、体育科の目標は「豊かなスポーツライフを実現するための資質・能力の育成」と表されている。これは、どの子ども、生涯にわたって運動に関わったり、健康な生活を送ったりするための資質・能力の育成が求められていると言える。

しかし、今の子供を見てみると、運動をする、あまりしないという「運動習慣の二極化」、睡眠や食事などの「生活習慣の乱れ」、体力・運動能力調査が示す「体力の低下」などの実態（課題）があると指摘されている。

これらの実態を改善していくためには、この問題を自分事として捉え、子供が自分のよさや可能性を認識し、周りにいる様々な人々を尊重し、協働しながら学んでいく必要がある。そして、豊かなスポーツライフを実現するための資質・能力の育成を目指し、運動に親しみ、望ましい生活習慣を身に付け、結果的に体力が向上するという体育学習を行うことが大切である。そのためには、子供一人一人が「豊かな学び」を行うことが必要であり、本主題で体育学習を行う必要性があると考えている。

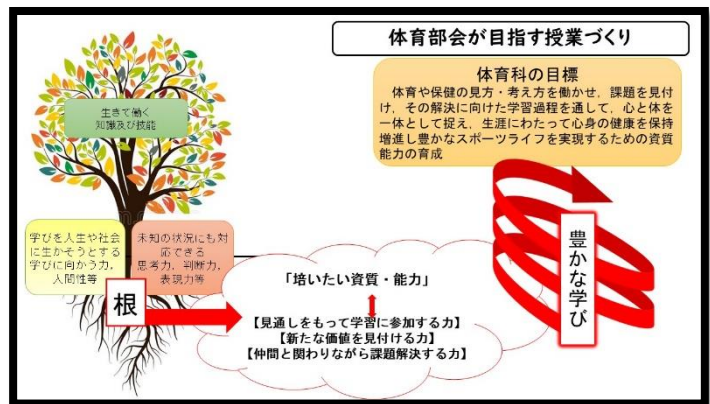
② 「豊かな学びが 子供の未来をつくる」について

体育部会では、研究主題を「豊かな学びが 子供の未来をつくる 体育学習」として研究を進めている。主題に掲げた「豊かな学び」とは、「見通しをもって学習に参加し、新たな価値を見出し、仲間と関わりながら課題解決に挑戦しようとする学び」である。それは、体育学習の中で、子供たちが「培いたい資質・能力」^{<説明1>}を豊かに発揮している学びであると考えている。そして、子供が「豊かな学び」を行うことにより、体育科の目標達成を目指す授業づくりに取り組んでいる。

昨年度、この研究主題のもと、『第63回 徳島県小学校体育科教育研究大会』が開催された。この大会では、子供が「おもしろいコト」を共有して学ぶ中で、「豊かな学び」を行い、課題解決に向けて運動に取り組む姿がたくさん見られた。例えば、これまでの運動経験や生活経験を生かして「こうすれば、こうなるかも」と取り組むなど、見通しをもって運動に取り組む姿。「ゲームや競争に勝つことも楽しいが、友達と協力して運動に取り組むことのほうがより楽しい」などの新たな価値を見出しながら運動に取り組む姿。「うまくいかないから A 君に相談しよう」などの友

達と情報交換したり教師にアドバイスを求めたりするなど他者と関わり合いながら協働的に課題解決をしようとする姿などである。このような姿は、課題を見付け、解決しようとする学びの過程の中で、「豊かな学び」を行い、自らの最適解を見付けながら、体育科の目標を達成しようとしている姿であると考えられる。

本部会が目指す体育学習については、樹木の生長を例に考えている【図①】。樹木の生長は、目に見える花や実ができることだけを大切にするのではなく、同時に、幹がたくましく育つことや、根をしっかりと伸ばしていくことも大切である。目に見える部分である花や実、幹を「生きて働く知識及び技能」と考えている。そして目に見えない（見えにくい）部分である根を「未知の状況にも対応できる思考力、



【図①：体育部会が目指す授業づくり】

判断力、表現力等」、「学びを人生や社会に生かそうとする学びに向かう力、人間性等」と考えている。また、「培いたい資質・能力」は「思考力、判断力、表現力等」「学びに向かう力、人間性等」の中に含まれているものであると捉える。 <説明2>

体育部会は、これら、目に見えない（見えにくい）部分の資質・能力を發揮することで根を伸ばし、体育科の目標達成を目指す授業づくりを進めていく。これは、目に見える部分の資質・能力（知識及び技能）を軽視しているということではない。子供たちは、学んでいく中で「こうなりたい」「うまくなりたい」という思いをもつ。そして、一人一人がその実現に向けて学んでいくのである。効率よく学んでいく子や試行錯誤を重ねながら学んでいく子など、目標に向けての学ぶ過程はそれぞれ違う。教師は、それぞれの子供の思いを大切にしながら、それを実現することができるよう支援することが大切であると考ええる。

このようなことから、今年度も「豊かな学びが 子供の未来をつくる 体育学習」と主題に据え、体育学習を通して、「生きる力」を育成する研究を推し進めることとする。そして、子供たちが豊かなスポーツライフを実現するための資質・能力の高まりを目指していく。体育科が目指す資質・能力の高まりを「大きな樹木へと生長する」、つまり、「子供の未来をつくる」と考え、体育学習を通してどのような学びを行っていくか研究していくこととする。

(2) 副主題設定の理由

今年度は、『おもしろいコト』の共有を図り、自ら学び続ける授業づくり」を副主題として設定した。その理由を次の3点から述べる。

① 昨年度の成果と課題

昨年度は副主題を『おもしろいコト』の共有から学びをスタートする授業づくり」とした。そして、「すべての子供が『おもしろいコト』を共有するための支援」と「子供の実態把握と学びの状況にあった支援」を研究内容の柱として研究を進めることとした。その理由として、以下の2点をあげた。

- ・ 『おもしろいコト』を共有するための支援」に取り組むことで、一人一人が学びの見通しをもち、そこから生まれる課題に挑戦する中で「豊かな学び」を実現することができるのではないか。
- ・ 「子供の実態把握と学びの状況にあった支援」に取り組むことで、すべての子供が安心して学びに参加できるようになるとともに、一人一人の学びにあった支援を考えることで「豊かな学び」を実現し、体育科の目標を達成することができるのではないか。

次に示した成果と課題は、各郡市の研究の中から報告のあったものである。

成 果

- ・ 「おもしろいコト」の共有から学びをスタートすることで運動の得意不得意に関わらず、全ての子供が課題解決に向けて運動に取り組むことができた
- ・ 単元に入る前に子供の実態把握をするためのアンケート調査（診断的評価）に取り組むことで全ての子供が運動に参加、挑戦するための環境設定（場やルール）や問いにつながった
- ・ 毎時間の振り返り（わたしたちの体育「学習のあしあと」）を活用することで、子供の意識を見取り（形成的評価）、支援につなげることができた など

課 題

- ・ 「おもしろいコト」の共有が図られた後の授業展開がうまくいかなかった
- ・ 子供の思いに寄り添い、学びの状況に合った環境設定、問いの工夫、支援の仕方など教師側のスキルを高めていくことが必要である
- ・ 多様化する子供たちの意識の見取りがうまくいかない
- ・ 単元構想の際に様々な学習の様相や子供の姿を想定して、指導・支援の準備をしておかなければならない など

このように、各郡市の実践から、「おもしろいコト」の共有を図るための「子供の実態把握（アンケート調査などによる診断的評価）」やそれに基づく「環境設定」（場やルール）、「問い」の工夫などについて成果と課題が明らかになった。成果については、得意不得意に関わらず、すべての子供が運動に参加することができたことや、子供一人一人が課題をもち、それを解決するために意欲的に運動に取り組むことができたなどである。課題としては、「おもしろいコト」の共有を図った後、子供の学びが停滞してしまうことがあげられる。それは、「新たな課題が見つからないという学びの飽和状態」、「解決の方法がわからないという困り感」などから起こっているのではないかと考えられる。子供の学びが停滞することなく、一人一人が自ら学び続けるためには、学びの状況に合わせた支援などの教師の関わりが重要になってくる。

② 「おもしろいコト」の共有を図る必要性

「おもしろいコト」^{<説明3>}とは、その運動を成立させる中心部分にある「本質的なおもしろさ」に対してその運動に夢中になる出来事（ドキドキワクワクするコト）である。例えば、ゴール型ボール運動の本質的なおもしろさは「攻防のおもしろさ」であり、「おもしろいコト」は、「シュ

ートする、させない」という出来事であると捉えている。

また、「おもしろいコト」を共有するとは、「これからどんなことを学んでいくのか」を全体で共有することであり、みんなが同じ意識で学びを進めていくために大切にしたいことである。さらに、「おもしろいコト」を共有することは、同じ価値観をもつことでもある。例えば、ハードル走においては、誰よりも速く走る子がよいと価値付けされるのではなく、『「いかにスピードを落とすことなくゴールまで移動できるか」に挑戦していることが大切』という運動の見方・考え方を共有する。

そうすることで、得意不得意に関わらず、すべての子供が運動に参加し夢中になることができる。そして、子供一人一人が課題をもち、それを解決するために意欲的に運動に取り組むことができるようになると考えられる。「おもしろいコト」の共有は、昨年度も研究内容として取り上げたが、「豊かな学び」を実現するために大切にしていきたいことであるため、今年度も引き続き研究を進めていくこととする。

③ 自ら学び続ける授業づくり

次に、子供が学びを停滞させずに自ら学び続けるための授業づくりについて、どのように考えていけばよいか述べる。

子供が学びを停滞させてしまう原因として「難しすぎる課題」や「簡単すぎる課題」が考えられる。そこで、「自ら学び続ける」ためには、全体で共有した「おもしろいコト」の中で、その運動に夢中になり続けることが大切である。また、子供から次々と「やりたいこと」が生まれたり、やりがいを感じたりすることも必要である。そのために、学びの中で自らの課題を見付け、解決のための見通しをもち、「活動」「振り返り」という過程を繰り返し、学びを広げ、深めていくことのできる子供を育てたい。このような学びができる子供は、学びの飽和状態になったり、解決の方法がわからなくなったりした時にも、自分なりに課題を見出したり、友達と協力して思考(試行)したりできるだろう。また、「豊かな学び」を行う中で発揮できるようにしたい「培いたい資質・能力」は、新たな課題を見付け挑戦し続けるなど、自ら学び続ける姿として現れてくるのではないかと考える。

このように、子供たちが「自ら学び続ける」授業づくりに取り組むことが、「豊かな学び」を実現し、豊かなスポーツライフにつながるのではないかと考えた。

3 研究内容

- 昨年の研究を踏まえ、副主題『「おもしろいコト」の共有を図り、自ら学び続ける授業づくり』に取り組み、「豊かな学び」を実現できるようにしていく。そして、研究主題の解明に向けた授業づくりを行うために、次の研究内容に取り組む。

- (1) すべての子供が「おもしろいコト」を共有するための支援
- (2) すべての子供が学び続けるための教師の関わり

(1) すべての子供が「おもしろいコト」を共有するための支援

「おもしろいコト」の共有から学びをスタートすると、「おもしろいコト」に関連して一人一人が課題をもち「こうなりたい」「うまくなりたい」という思いをもつことができるのではないかと

そして、子供たちは、今自分には何が必要なのかということを考え、自分なりの最適解を見付けようとしていくのではないかと考える。そこで、次のように、運動領域と保健領域に分けて説明する。

ア 運動領域では

運動領域においては、「運動の本質的なおもしろさ」の中にある「おもしろいコト」に意識が向くように活動を提示する。「おもしろいコト」の共有を図るための手立てとして、まず、子供の実態把握を行う。そうすることで、単元に入る前に、その運動に対してどのようなイメージをもっているのかを的確に捉えることができるようにする。そして、それをもとに、「環境（場やルール）」を設定して、誰もが運動に参加できるようにする。また、運動に対して苦手意識をもち、恐怖心や不安感から、なかなか参加することができない子供には、教師が「いっしょにやってみよう」などの声かけをしたり、一緒に運動に取り組んだりするなど安心して運動に取り組むことができるように支援する。

次に、子供が「おもしろいコト」に夢中になってきた姿を見取り、この単元ではどんなことを学んでいくのかということを全体で共有する。例えばゴール型ボール運動の単元では、「ゴールがたくさん決まった」という結果より、「どうすればシュートチャンスをつくることができるか」という過程を大切に運動の見方・考え方を共有することでもある。

「おもしろいコト」の共有を図ることで、同じ意識で学びを進めていくことができるようになる。そして、得意不得意に関係なく、どの子も運動に参加し、課題をもって運動に取り組み、培いたい資質・能力を発揮しながら自分なりの最適解を見つけることができるようになるのではないか。

もし、子供たちの意識が十分に「おもしろいコト」に向いていない場合は子供の意識に沿った場づくりなどの「環境」を設定し直して「おもしろいコト」の共有を図ることが必要である。

イ 保健領域では

保健領域においては、「本質的なおもしろさ」を「探求するおもしろさ」、「おもしろいコト」を『保健領域の学習内容』について考えるコト」と捉えている。運動領域と同じように、「探求するおもしろさ」の中にある、『保健領域の学習内容』について考えるコト」へ「どうして?」「考えてみたい!」のように意識が向くようにする。(例えば、「健康の捉え方はそれぞれみんなちがうな」「自分たちの学校は安全な学校なのかな」など)そして、子供たちの意識が「おもしろいコト」に向いてきた状況を見取り、これから、この単元ではどんなことを学んでいくのかということを全体で共有する。これが「おもしろいコト」の共有である。

「おもしろいコト」の共有を図るために、単元のはじめに、子供の実態把握のためのアンケート調査などの事前調査を行うことが考えられる。その中で、これから学ぶことに対してどんなイメージをもっているのかを確認する。そして、そのアンケートをもとに、授業づくりの軸を考えていくようにする。事前調査をもとに子供一人一人の不安や疑問を解消できるように授業づくりを進めていくことを大切にしていく。また、生活習慣調査やウェビングマップなどの方法で、子供たちの実態把握を行うことも考えられる。そして、自分自身の健康や安全に関する認識を確認したり、イメージを話し合ったりできるような「環境」を整える。

そうすると、これから自分が学んでいくことについて新たな気付きや発見が出てくるだろう。

おもしろいコトの共有を図ることで子供は、問いに沿って自分や自分の周りのこととして考えていこうとするだろう。そして、運動領域と同様に、どの子も健康や安全について、課題をもち、培いたい資質・能力を発揮しながら自分なりの最適解を見つけることができるようになるのではないか。

教師は、科学的な知識をただ伝達するのではなく、子供たちが切実性をもって課題を解決できるようにして、子供一人一人の健康や安全に対する思いや認識に寄り添うようにする。その時に、養護教諭と連携を図り、授業を進めていくことも考えられる。

(2) すべての子供が学び続けるための教師の関わり

ここでは、教師の関わりを、「問い」の工夫、「見取り」と「支援」という視点で考えていく。「見取り」を行う上では、子供が何を求め、何を考え、運動や探求をしようとしているのか、子供を内面からつかむことが大切である。つまり、「見取り」とは、結果から子供を見るのではなく、子供の思いや願いに共感し、内面から子供を見ようとする教師の営みであると考えられる。また、「支援」とは、子供の思いや願い（「こうなりたい」、「うまくなりたい」など）に寄り添った教師の関わりであると考えられる。一人一人の学びの状況を見取り、子供の思いや願いに応じた支援を行うことで、学び続けることができる子供を育てていくことができるのではないか。

① 「問い」の工夫について

「おもしろいコト」の共有を図り、これから「どんなことを学んでいくのか」ということや運動や健康・安全についての見方・考え方を共有することができたら、単元を通して子供たちが思考（試行）していく問い（「単元を貫く問い」）を出す。そして、子供たちが「おもしろいコト」の共有から生まれる課題を解決していくことができるようにする。また、子供たちの学びの状況を見取りながら、毎時間の「問い」の立て方を工夫できるようにする。

例えば、ゴール型のボール運動（サッカー）で考えてみる。「『シュートチャンスをつくる、つくらせない』ということをこれから考えていく」と共有を図ると「どうしたらシュートチャンスをつくれるかな つくらせないようにできるかな」という問いを出す。子供たちがチームの中での役割などに意識が向いてきたのを見取り、「チームで協力して、どうしたらシュートチャンスをつくれるかな つくらせないようにできるかな」などと「問い」の立て方を工夫するようにする。

子供たちは、この「単元を貫く問い」から生まれる課題を解決するために、一人一人がこれまでの学びや体験を振り返り、見通しをもって取り組んでいく。その課題は一人一人違ったものになるだろうが、同じ意識の中で学びを進めていくため、友達と関わり合ったりするなど協働的に学びを進めていくことができる。

② 一人一人の学びの見取りについて

「おもしろいコト」の共有が図られた後の場面における学びの状況把握は、特に、子供を内面から見ようとすることが大切である。「できたかどうか」という結果だけを見取るのではなく、「何をしようとしていたのか」「どうしてそうしようと思ったのか」という学びの過程を見取り、支援を考えていく。教師は、子供たちが課題に挑戦していく中で何をしようとしているのか、何

につまずいているのかを的確に見取り（「評価」し）、その子にとって必要感のある支援を考えていかななくてはならない。

また、授業の中で教師が見取ることができなかつた子供の思いや気付きを把握するために、副読本「わたしたちの体育」の「学習のあしあと」のページや保健学習のワークシートなどに記入した毎時間の振り返りを活用することも考えられる。そして、子供一人一人の振り返りから、子供の意識の流れに沿った単元計画へと修正したり、次時の関わり方を想定したりしていく。

教師が子供の思いや願いに寄り添い、的確に学びの状況を見取り（評価し）、把握することで、子供自らが「豊かな学び」を発揮しながら学び続けることができるように支援することができるようになるのではないかと考える。

③ 学びの状況にあった支援について

「2 主題設定の理由」において、本部会が目に見える部分の資質・能力（知識及び技能）を軽視していないことは先に述べた。これまでの内容が、幹や根を育てるものだとすれば、この項では、花や実を見てどのように支援するかという内容を述べたいと思う。

授業時には、常に一人一人に合った的確な支援を考えることが重要である。例えば、「前転をした後、元の体勢にもどることができない（マット運動）」子供へどのように支援するか考えてみる。そこでは、「足を曲げてかかとをお尻に引きつけてみよう」と技術情報を伝えたり補助をしたりすることが考えられる。また、「副読本をみてみよう」「友達の動きをみてごらん」など、必要な情報を具体的に示すことも考えられる。ここで大切なことは、どのように支援するとその子の学びを促すことができるのかを考える必要があるということである。子供が「うまくなりたい」と思考（試行）している時に「答え」を教師が与えてしまうと、意欲が低下し、学びが停滞してしまうことも考えられる。一人一人の意識や学びの状況によって、いろいろな支援の仕方が考えられる。確認したいことは、教師の「教えない」「教えなければならない」と思っている内容を一齐に教え込む指導が中心になるのではないということである。

子供が課題解決に取り組む過程の中で、しっかりと内面を見取り、どのように支援するかが大切であり、子供一人一人の学びを広げ、深めることができるのかということを意識して支援を行う。そうすることで、一人一人が「おもしろいコト」から生まれる課題追求への意欲を失わずに自ら学び続けることができるのではないかと考える。

4 研究方法

(1) 研究大会において

- 本年度は研究主題及び副主題の解明に向け、郡市研究会、「第60回中・四国小学校体育研究大会（山口大会）」において研究成果を発表する。

(2) 各郡市部会において

- 研究主題及び副主題の解明に向けて、授業研究会及び研修会を行い、研究成果をまとめる。
- 研究会や研修会に自主的に参加するとともに、各郡市で取り組んだ研究内容の共有を図る。

(3) 各校において

- 体育主任・体育部員を中心に、すべての子供が参加し「おもしろいコト」の共有を図り、自ら学び続けることができる授業づくりについて実践を進める。
- 年間カリキュラムのもと単元学習の実施及び副読本の積極的な活用を通して、子供の主体的・対話的な学びを図り、運動好きの子供を育成し、体力や運動能力を一層向上できるようにする。
- 研究領域・研究学年（中・四国大会研究領域及び小教研ローテーション表より）

郡市	領域	担当学年	郡市	領域	担当学年
第65回徳島県小学校体育科教育研究大会（令和5年度）					
徳島市・名東郡	会場郡市代理		板野郡	水泳	低学年
鳴門市	体づくり	中学年	名西郡	器械	高学年
小松島市・勝浦郡	ボール（小）	低学年	阿波市	陸上	高学年
阿南市	ボール	高学年	吉野川市	保健	中学年
那賀郡	器械	低学年	美馬市・美馬郡	陸上	高学年
海部郡	体づくり	低学年	三好市・三好郡	表現	高学年
第60回中・四国小学校体育研究大会（山口大会）					
美馬市 美馬郡	体づくり （ほぐし）				

第61回 鳥取大会 三好市・三好郡（保健【中・高】）

第62回 愛媛大会 徳島市・名東郡・鳴門市（器械【中・高】陸上【高】）

第63回 島根大会 小松島市・勝浦郡（ボール【高】）

<参考文献>

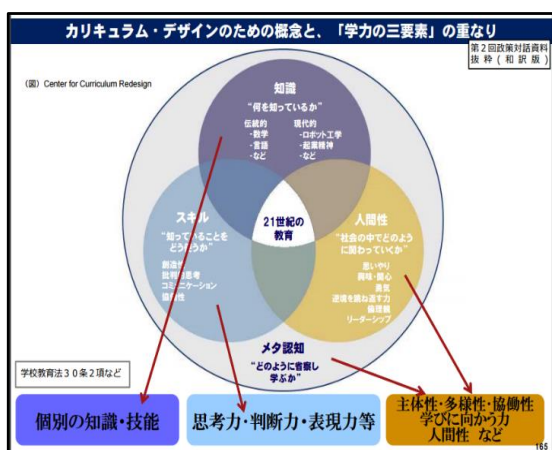
- (1) 文部科学省、「小学校学習指導要領解説 体育編」, 東洋館出版社, 2018
- (2) 文部科学省、「小学校学習指導要領解説 総則編」, 東洋館出版社, 2018
- (3) 徳島県小学校体育連盟,「第57回中・四国小学校体育研究大会（徳島大会）大会要項」
第57回中・四国小学校体育研究大会（徳島大会）実行委員会, 2019
- (4) 徳島県小学校教育研究会,「令和3年度 徳島県小学校教育研究会 研究主題」
徳島県小学校教育研究会, 2020
- (5) 松田恵示,「『遊び』から考える体育の学習指導」, 創文企画, 2016
- (6) 徳島県小学校教育研究会,「徳島県小学校教育研究会令和4年度研究主題」
徳島県小学校教育研究会, 2021
- (7) 徳島県小学校体育連盟,「第63回徳島県小学校教育研究会 研究紀要」
徳島県小学校教育研究会体育部会, 2021
- (8) 梅澤秋久, 苫野一徳,「真正の『共生体育』をつくる」, 大修館書店, 2020
- (9) 文部科学省国立教育政策研究所,「『指導と評価の一体化』のための学習評価に関する参考資料」
教育課程研究センター, 2020

<説明1> 「培いたい資質・能力について」（令和3年度 小教研体育部会 研究主題）

- ◆ 培いたい資質・能力とは、「豊かな学び」をすることを通して体育部会として培いたい資質・能力
 - ・「見通しをもって学習に参加する力」
 - ・「新たな価値を見付ける力」
 - ・「仲間と関わりながら課題解決する力」

<説明2> 『カリキュラム・デザインのための概念と、「学力の三要素」の重なりについて』

（第2回政策対話 資料抜粋（和訳版））



図①：第2回政策対話 資料抜粋（和訳版）

「教科等ごとの枠の中だけではなく、教科等横断的な視点をもってねらいを具体化したり、他の教科等における指導との関連付けを図りながら、幅広い学習や生活の場面で活用できる力（以下教科等横断的な資質・能力説明）を育むことを目指したりしていくことも重要となるとされた。この力については、上の図「学力の三要素」のなかに示されているように、子供に育成したい資質・能力と関連していることがわかる。」これを受けて、「培いたい資質・能力」は三つの柱と関係づけて考えることとする。

<説明3> 「本質的なおもしろさ」と「おもしろいコト」の捉え

（令和元年度 小教研体育部会 研究主題）

- ◆ 「本質的なおもしろさ」と「おもしろいコト」

昨年の実践から、「本質的なおもしろさ」「おもしろいコト」について研修部で以下のように整理してみた。

「おもしろいコトの共有」→「これから学習することはこういうことだ」ということをみんなで共通理解し運動の得意不得意に関わらず、みんなが参加することができるようにすること

<運動領域>

 - 「本質的なおもしろさ」→その運動を成立させるもの
 - 「おもしろいコト」→その運動に夢中になる出来事（ワクワクドキドキするコト）

<保健領域>

 - 「本質的なおもしろさ」→探求するおもしろさ
 - 「おもしろいコト」→『保健領域の学習内容』について考えるコト

<説明4> 学習評価について 「診断的評価」と「形成的評価」の捉え

(「指導と評価の一体化」のための学習評価に関する参考資料)

◆ 『「指導と評価の一体化」のための学習評価に関する参考資料』より

「学習評価は、学校における教育活動に関し、児童生徒の学習状況を評価するものである。答申にもあるとおり、児童生徒の学習状況を的確に捉え、教師が指導の改善を図るとともに、児童生徒が自らの学びを振り返って次の学びに向かうことができるようにするためには、学習評価の在り方が極めて重要である。」とされている。

◆ 見取り

子供の表面的な言動として表れたことについてではなく、それを通して内面について理解するということ。「そう言わしめているものは何か」というように、子供の真相に迫ることが必要である。

<補助資料>

(1) 令和3年度徳島県小学校教育研究会 研究主題 一部抜粋

○ 未来社会の予測と小教研が考える「求められる資質・能力」の捉え

◆令和3年度 徳島県小学校教育研究会 研究主題 2 主題設定の理由

これからの社会は、Society5.0の実現に向けて急激に変化するとともに、グローバル化も一層進展する。さらに、少子高齢化・人口減少社会の中で、社会構造や雇用環境も大きく変化するなど、先行きが不透明な時代といえる。今般の新型コロナウイルス感染症の拡がりは、私たちの予想を大きく超え、前例や慣習では対応できないことも多く、創造力を働かせることや、斬新なアイデアが求められる状況が続いている。このような社会の中で、主体性をもって生きていくためには、予測不能な社会に対応する力をつけていくという発想から、自ら変化を創り出す力をつけていくという発想への転換が必要である。

(2) 学習指導要領 総則編・体育編 一部抜粋

○ 学習指導要領に記された学校教育が育成を目指す資質・能力の捉え

◆学習指導要領解説 総則編・体育編 第1章総説 (P.1「1改訂の経緯及び基本方針」より)

このような時代にあって、学校教育には、子供たちが様々な変化に積極的に向き合い他者と協働して課題を解決していくことや、様々な情報を見極め知識の概念的な理解を実現し情報を再構成するなどして新たな価値につなげていくこと、複雑な状況変化の中で目的を再構築することができるようにすることが求められている。

(3) 学習指導要領 総則編 一部抜粋

○ 育成を目指す資質・能力の明確化 (3つの柱)

◆学習指導要領解説 総則編 (P. 3) 第1章 総説 1 改訂の経緯及び基本方針
 (2) 改訂の基本方針 ② 育成を目指す資質・能力の明確化
 今回の改訂では、知・徳・体にわたる「生きる力」を子供たちに育むために「何のために学ぶのか」という各教科等を学ぶ意義を共有しながら、授業の創意工夫や教科書等の改善を引き出していくことができるようにするため、すべての教科等の目標及び内容を「知識及び技能」「思考力、判断力、表現力等」, 「学びの向かう力, 人間性等」の三つの柱で再整理した。

(4) 学習指導要領 総則編 「教科等横断的な視点に立った資質・能力」一部抜粋

○ 教科等横断的な視点に立った資質・能力とは

◆学習指導要領解説 総則編 (P. 47 「2教科等横断的な視点に立った資質・能力」より)
 (1) 児童の発達の段階を考慮し、言語能力、情報活用能力(情報モラルを含む。), 問題発見・解決能力等の学習の基盤となる資質・能力
 (2) 児童や学校、地域の実態及び児童の発達の段階を考慮し、豊かな人生の実現や災害等を乗り越えて次代の社会を形成することに向けた現代的な諸問題に対応して求められる資質・能力

○ 本質的なおもしろさとおもしろいコト, 問いの例

領域		本質的なおもしろさ	おもしろいコト	問いの例
体づくり	体ほぐし	対話する おもしろさ	感じるコト	どうすれば感じられるか
	多様・体力	操作する おもしろさ	できるコト	どうすればできるか
器械運動	マット	移動する	マットの端まで行くコト	どうすればマットの端まで行けるか
	鉄棒	おもしろさ	鉄棒の上に上がったり回ったり降りたりするコト	どうすれば鉄棒の上に上がったり, 回ったり降りたりできるか
	跳び箱		跳び箱の向こうに行くコト	どうすれば跳び箱の向こうに行けるか
陸上運動	短距離走	移動する おもしろさ	スタートからゴールまで行くコト	どうすればスタートからゴールまで移動できるか
	ハードル		ハードルを走り越えてスタートからゴールまで行くコト	どうすればハードルを走り越えて, スタートからゴールまで移動できるか
	リレー		スタートからゴールまでバトンを運ぶコト	どうすればスタートからゴールまでバトンを移動できるか
	幅跳び		ねらったところに着地するコト	どうすればねらった所に着地できるか
	高跳び		バーの向こうに着地するコト	どうすればバーの向こうに着地できるか
水泳	移動する おもしろさ	目的地まで行くコト	どうすれば目的地まで行けるか	

ゲーム		攻防のおもしろさ	攻めたり守ったりするコト	どうすれば攻めたり守ったりできるか
ボール運動	ゴール型	攻防のおもしろさ	シュートするコト シュートさせないコト	どうすればシュートできるか防げるか
	陣取り型		前に進むコト 前に進ませないコト	どうすれば前に進められるか進ませないようにできるか
	ネット型		ボールを落とすコト ボールを落とさせないコト	どうすれば相手コートにボールを落とせるか自コートに落とさせないか
	ベースボール型		塁を盗るコト 塁を盗らせないコト	どうすれば塁を盗れるか盗らせないか
表現	表現	表現するおもしろさ	なりきるコト	どうすればなりきれるか
	リズムダンス	リズムに乗るおもしろさ	リズムに合わせるコト	どうすればリズムに合わせられるか
保健	健康な生活	探求するおもしろさ	「健康な生活」について考えるコト	どうすれば健康な生活をおくることができるか
	体の発育・発達		「体の発育・発達」について考えるコト	どのように大人へと成長していくのかな
	心の健康		「心の健康」について考えるコト	
	けがの防止		「けがの防止」について考えるコト	どうすれば自分たちの学校や町が安全な学校になるだろうか
	病気の予防		「病気の予防」について考えること	どうすれば100歳まで健康に生きられるか